

駿河湾奥部大陸棚の地質構造

Geological structure of the continental shelves in the northernmost part of Suruga Bay.

梶 琢 [1]; 生野 静香 [2]; 根元 謙次 [3]; 山崎 晴雄 [4]

TAKU KAJI[1]; Shizuka Shono[2]; Kenji Nemoto[3]; Haruo Yamazaki[4]

[1] 首都大・都市環境・地理; [2] 東海大・海洋; [3] 東海大・海洋学部・海洋資源学科; [4] 首都大学東京・都市環境・地理
[1] Environmental Science, Tokyo Metro Univ.; [2] Tokai Univ.; [3] Dept. of Marine Mineral Resources, School of Marine Sci. & Tec., Tokai Univ.; [4] Dep. Geography, Tokyo Metropolitan Univ.

駿河湾はプレート沈み込み境界をもつ構造性の湾として多くの研究がなされてきた(加藤ほか,1983; 加藤ほか,1985; 北里,1988; 小山ほか,1992; 新妻ほか,1992等)。駿河トラフを中心として、西側(静岡側)のユーラシアプレート、東側(伊豆側)のフィリピン海プレートが位置しており、トラフを境に東西で異なる地形構造をもつ。駿河湾の地質構造はトラフ西岸沖や中央付近では良く理解されているが、湾奥の構造は富士川前面の海底扇状地の存在により不明瞭である。富士川海底扇状地は、最頂部は標高25mに位置し、陸上部の地形は富士市や富士宮市の発達により影響を受けている。駿河トラフ北方延長に位置する富士川河口部から富士山南西麓に至る地域には断層群が存在し、これらの断層群は富士川西側の入山、芝川断層、東側の入山瀬、大宮、安居山断層である(山崎ほか,1985)。プレート境界とされるトラフ底の構造は、それら陸上の断層群につながる。しかし、駿河トラフと断層群との直接的な関係は不明である。

駿河湾では約2万年前のウルム最盛氷期における浸食平坦面の分布が知られている。相良沖では-130m(石井・根元,1995)、大崩海岸沖で-130m ± 10m(山本ほか,1998)、有度丘陵沖で-110m ± 10m(根元ほか,1998; 石井ほか,1998)、内浦湾では-105m ± 5mに存在する(根元ほか,1989)。しかし、湾奥部における浸食平坦面の分布は明らかでない。本研究では、それらの分布を明らかにするための海底地形資料とし、2001年11月から2002年2月に国土交通省中部地方整備局沼津工事事務所により実施されたマルチファンビームデータと1977年に海上保安庁が駿河湾全体で実施したスパーカー記録を使用した。その結果、湾奥部での精密な海底地形と地質構造を明らかにすることができた。湾奥部の大陸棚上には-10mから-30mと-50mから-120mに2つの緩斜面の存在を確認した。-50mから-120mの緩斜面は東から西にいくにつれ徐々に波状の地形に変化していく。これらの地形の特徴は田子ノ浦の東西で明らかに異なる。また、音波探査からは湾奥部(内浦から富士川にかけての地域)での浸食平坦面の外縁水深をプロットしたところ、湾奥部東側(内浦湾)から西側(富士川)にかけて分布水深は緩やかな傾斜を示すが、富士川河口付近で大きなずれが生じる。本研究ではこれらの地形的特長とウルム最盛期の浸食平坦面の分布を明らかにした。